

しかもこれらの植物は、香りとして表現されている。匂いは私たちの脳の古皮質に働きかける。隠されたものが、記憶の深層に働きかけてくると思わせるようなこの表現は、なかなか意味深い。物語をこのように読み進めていくと、驚くほど多くの宗教的なモチーフが現れてくるのだ。

そして、キリストの受難、キリストによる救済の物語との類似も読み取ることができる。ただしここで注意すべきは、物語の結末だ。キリストは、その身を捧げることによって、人類を救済し、永遠の生命を実現したが、ドリアンはその身を犠牲にして、美を救済し、永遠の美を実現したのだ。ワイルドの、美への信仰告白と言うこともできるだろう。

キリストは、当時のユダヤ社会にあって反社会的と弾劾されたが、神の真理を説いた。デカダンス文学も反社会的と做されたが、美の心理を説いた、といっている言い過ぎであろうか。

The Importance of Being Earnest

における喜劇化のプロセス

広 川 治

(駒沢大学講師)

劇作家 Wilde は、*The Importance of Being Earnest* で登場人物をどのように意識的に人工的な嘘の喜劇的世界に導いているのだろうか。注目してみたいのは、Jack と Algernon の喜劇的対照という点である。Algernon は前3作のダンディの性質を受け継ぎ、次々と Jack 相手にウィットに富んだセリフを披露していくが、対する Jack は、ウィットをもって充分な反撃に出ることは少なく、特に第1幕では、“Oh, that is nonsense.” を繰り返すのみで、徹底して周囲の人物や状況に翻弄されているのである。

Algernon が仕掛ける側の trickstar のタイプに近いとすれば、Jack は騙し、からかいの対象 (comic butt) のタイプに属すると言えるだろう。日本の狂言でいえば、その上下関係は別として、大名もものの太郎冠者が Algernon で、大名が Jack に例えられるほど、二人のコントラストは第1幕において明確である。例えを現代の劇から挙げるなら、喜劇的対照という点では、Neil Simon の *The Odd Couple* (『おかしな二人』) に近い。主人公の二人の男がデートするイギリス人姉妹の名が Gwendolen と Cecily になっているこの喜劇でも、性格が正反対の二人の主人公のコントラストが喜劇的効果の中心にあ

る。

このような喜劇的コントラストの一端を担っている Jack の喜劇的な役割は、彼が見せる喜劇的な驚き (comic surprise) に明らかである。彼は Algernon に “I don't give my consent.” と Gwendolen との結婚を否定されると、“Your consent!” と憤慨し、Cecily の名前を出されると、“Cecily! What on earth do you mean?” とあわてふためく。彼に対する Algernon の優位は少なくとも第1幕においては明らかだが、第2幕では、Algernon が Cecily に会うことによって Jack との喜劇的コントラストにも変化が起こる。Jack と同様に Ernest という名前が必要になった彼は、第1幕の Jack のような ‘comic surprise’ を見せ始めるが、それは Cecily が彼に会う前から想像上の恋愛を日記につけていたことを語る場面の反応 (“For the last three months? / Darling! And when was the engagement actually settled? / My letters! But my own sweet Cecily, I have never written you any letters.”) によく表れている。また、当初の Wilde のプランでは、現在の第2幕にあたる部分で、Algernon と Jack の立場を逆転させるというプロセスをとっていた。Alexander にカットされる以前の4幕版では、Algernon は Ernest を名乗っているために、Gribsby という役人から、Jack が Ernest の名義で作った借金を取り立てられて “What perfect nonsense!” と ‘comic surprise’ を示すことになるのである。

しかし、第3幕の女性同志で結託して釈明を迫る Cecily と Gwendolen に対する場面においては、Jack と Algernon に喜劇的コントラストより、むしろ喜劇的同質性が表現されている。“Our Christian names!” と叫ぶ ‘comic surprise’ は、この場面では、卜書にも、“Speaking together” とあるように同時に話され、洗礼を受けて Ernest になると “I am!” と同じ誓いを述べ、献身の鑑である男性同志として “We are!” と握手をする。草稿の一つのこの場面の卜書には、Wilde が当初意図していた二人の同質性が “like Siamese twins” という表現で書かれている。実際、Jack が洗礼を頼んだ時に、Chasuble も Jack と Algernon を、教区内の双子といっしょにして洗礼を受けさせようとしていたことを思い出してほしい。

このように Jack と Algernon は、喜劇的役割においてまさに ‘twins’ になるのである。Plautus のローマ喜劇や Shakespeare の *The Comedy of Errors* の双子が、同一の顔という原因で起きる劇の主人公だとすれば、Wilde の Jack と Algernon は、同一の名前という原因が起こす劇の喜劇的雙生児と言えるだろう。